

明治大学外国人研究者招聘制度 報告書

<招聘教授・研究員の情報 / Guest Professor・Guest Scholar>

氏 名	項瑩瑩
Name	
所属機関(派遣元)	華中師範大学
Affiliation (Home Organization)	
現在の職名	博士後期課程三年生
Position	
研究期間(日本への入国日から出国日)	2024年12月9日～2025年6月8日
Period of Stay (from the date of entry to departure)	
専攻	日本近現代文学
Field of Research	
ホスト教員氏名と所属学部研究科等	竹内栄美子 文学部
Name of host teacher and affiliation at Meiji University	

<外国人研究者からの報告 / Foreign Researcher Report>

①研究課題 / Research Theme
差別と文学——日本近現代小説における「アイヌ」表象
②研究概要 / Outline of Research
明治維新後、近代日本国家の建設とともに、1871年の戸籍法により、アイヌ民族が日本国民体系に編入された。それ以来、幸田露伴の『雪紛々』(1889)をはじめ、アイヌ民族を題材にする近代小説が描かれるようになってきている。しかしながら、日本近現代文学史において、部落民文学や在日朝鮮人文学と同様に、「アイヌ」を主題とした文学作品は長らく周縁的な位置に置かれてきた。主流文学の枠組みから排除された結果、文学研究においても十分な注目が払われず、アイヌ表象の変遷やその文学的意義に関する体系的考察が欠如しているのが現状である。本研究は、「アイヌ」を題材にする小説を研究対象とし、日本近現代文学における「アイヌ」表象の変遷を体系的に考察することを目的とする。時代背景の推移を分析軸とし、各時期の代表的作品を精査することで、「アイヌ」を文学上でどんなふうに扱っているのかを明らかにする。具体的に言えば、まず、「帝国主義時代」において、宮本百合子『風に乗って来るコロボックル』(1918)、鶴田知也『コシャマイン記』(1936)を考察し、「落ちぶれた」他者としての「アイヌ」が描かれたことが分かった。このようなアイヌ表象は、近代日本が帝国主義的拡張を推進した歴史的文脈と深く連動し、社会全体に満ちた「一等国」「優越な日本人」と「劣等な他者」という二項対立意識が反映されたと見える。つぎは、「戦後民主主義時代」において、武田泰淳『森と湖のまつり』(1955)と石森延男『コタンの口笛』(1957)の分析を通して、この時期の「アイヌ」表象は、帝国時代のような一方的に負けた「アイヌ」の表象とは違い、戦後初期の「民主」「平和」「国民」とかの時代言説の下で、「和解」の「アイヌ」がこの時期の特徴だという結論ができた。そして、「多文化主義時代」に至ると、池澤夏樹『静かな大地』(2003)と津島佑子『ジャッカドフニ——海の記憶の物語』(2016)では、民族の誇りを持ち、主体性のある、自立する「アイヌ」像という新たなアイヌ表象が可能になった。このような分析を通して、文学上の「アイヌ」表象の時代変遷を把握することができ、「文学」がいかに時代に制限され、また時代の言説に加担したか、ある程度見えてきた。また、時代変遷に伴い、「アイヌ」を描いた文学作品を検討していく過程の中で、「アイヌ」がどのように文学に周辺化され、または注目されたのか、という力学をもさらに検討したい。
③招聘期間中の研究活動の実績 / The research results as Guest Professor・Guest Scholar
明治大学での研究期間は半年しかない短時間ながらも、竹内先生のもとで、極めて有意義な研究時間となったと言える。 1. この六か月間においては、本研究の基礎的枠組みに沿いながら、アイヌを描いた代表作品をめぐる、竹内先生とゼミの皆さんと一緒に読んで、検討してきた。竹内先生が冬休みを利用し、「自主ゼミ」を特別に設けてくれた。その期間において、具体的には、幸田露伴の『雪紛々』、宮本百合子の『風に乗って来るコロボックル』、鶴田知也の『コシャマイン記』、武田泰淳の『森と湖のまつり』という四つの作品について、研究発表を行った。それに、新学期のゼミにおいて、さらにアイヌ作家である上西晴治の『コシャマインの末裔』についても発表した。この発表では、従来の日本人作家によるアイヌ表象とは異なる、アイヌ自身の視点から描かれた文学表現の特徴について焦点を当てた。この一連の研究発表を通して、先生とゼミの皆さんと有益な意見交換ができ、今後の研究展開において重要な示唆を得た。 2. 本研究への認識を深化させるため、竹内先生の引率のもと、ゼミ生一同で北海道へ春合宿を実施した。北海道では、アイヌ文化の一大代表地である白老町の「ウポポイ民族共生象徴空間」を見学し、「北海道道立文学館」や「市立小樽文学館」でも展示見学や資料調査を行った。充実な春合宿を通して、北海道という特色のある文学空間への理解も、アイヌ民族への理解も深めることができ、文献研究だけでは得難い「身体知」としての北海道文学体験が可能となった。 3. また、研究期間中に、本研究に関する資料の収集は重要な研究活動の一つであるが、豊富な資料のある明治大学図書館のおかげで、資料の収集が順調に進めた。ほかに、国立国会図書館や北海道道立文学館においても、資料の収集を行った。それに、竹内先生からも、資料の紹介などが多大な協力をもらった。 4. この半年間の共同研究で得た啓示のもと、『静かな大地』に関する一篇の論文を書き上げ、中国の研究雑誌『外国文学研究』に投稿した(審査中)。そして、『コシャマインの末裔』についての分析も論文化している途中である。また、以上の発表内容に基づき、本研究の全体的な進捗も順調に進めている。